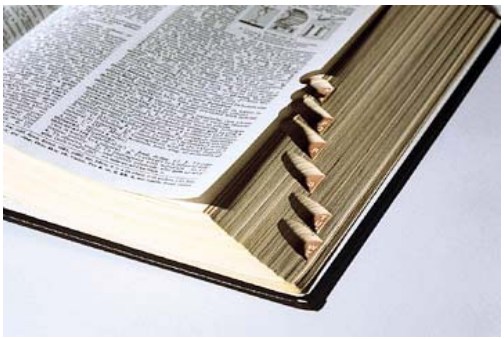
外国語のススメ （教員コラム） 平成24年度バックナンバー

※執筆者の所属・職名は掲載当時のものです。

【第36回】辞書の話をしよう

法学部准教授　　柴田　　隆（ドイツ語担当）



辞書の話をしよう。

外国語学習において、学習者にとって大切なものが3つある。辞書と教科書、教員である。教員は、それ次第では、その言語自体が嫌いになったりするほど重要なものなのだが、大抵の教育機関では（大学でも）、選ぶことができない。選択必修などと書かれていると、自分のやりたい言語の、どのクラスでも選択できそうな気がするのだが、実際は、クラスが指定されていて、教員は最初から決まっている。

学習者は教科書も選べない。なぜなら、勝手に指定されたクラスの教員が、勝手に自分の好みで選んでしまうから。唯一、学習者が自分で選べるのは辞書である。では、どう選んだらよいのだろう。

中学校に入学した孫に電子辞書を買ってやるのが良いかどうか？という議論が、新聞などでも報道されたのは10数年前だろうか？ということは、現在大学に来ているみなさんは、辞書と言えば、電子辞書しか思いつかないのかもしれない。また「ゆとり教育」のせいか、中学校レベルのA語教育でもB語教育でも、辞書を使わせないという傾向もあったようだ。だから、大学に来て辞書の「初めてのお使い」という学習者もいたりする。

初級、あるいは入門から学習する言語の教員は、例外なしに学習用に作られた「紙の」辞書を薦める。「なんで？電子辞書、入学祝いにもらったのに」という声も聞こえるが、でも、断固として紙の辞書でなければならない。なぜだめなのか？よく言われるのは一覧性の問題である。電子辞書は、表示スペースが小さく、紙に印刷された文字より、解像度が低いため、一度に認識できる情報量が少ない。即ち、スクロールしないと、全ての情報を見ることはできない。それに比べると、紙の辞書では、少なくとも学習用の辞書なら、一つの項目が見開き2ページ以上に渡ることはないので、一瞥すれば、何がどこに書かれているかわかるということだ。「えっ、そんなの意味ないじゃん！最初に書いてある意味（日本語）だけ見れば済むのに」くくく「むむむ、あのねぇ、使い方や文脈が違うと、全く意味が異なる言葉もあることを知らないの？」と言っても、あらゆる間投詞を「やばい」とそのヴァリエーションで済ませている方たちには「馬耳東風」「馬の耳に念仏」かな。

もっと問題なのは、電子辞書の検索方法である。電子辞書ならどれをとっても、いわゆるインクリメンタル・サーチができる。これは、例えばaと打てば、aから始まる単語を表示し、aの次にｂと打てば、abから始まる単語を全て表示していく検索方法で、言語によるが3文字から5文字ぐらい入力すれば、目的の単語が表示されてしまう。携帯電話でも似たようなことが起こるが、あれは日本語変換の方式なので、学習予測変換の一種である。いずれにせよ、入力者の手間を省くギミックなので、使用者にとっては便利なものである。

しかぁーし！（横幅だけ二倍の文字にしたかったのだが、）しかぁーし、それで単語を覚えられますか？色々な用法を記憶できますか？最低限の単語すら覚えないで、外国語学習が成り立つわけがないことは、ちょっと考えればわかるはずですね。
記憶と言うのは、神経に対して同じ刺激を、何度も与えることで、ある種のバイパス回路を作り、そのループの優先度を高くするということのようなので、少なくとも電子辞書や、ネット上の辞書を使っていたのでは、そのような刺激は得られない。いつでも携帯電話で、ネットで調べられる環境があれば、自分の頭で覚える、考える必要はないとおっしゃる方は、多分、外国語学習と言うのは、旅行会話ぐらいができればいいのだ！と思っていらっしゃる方かもしれない。そうだとしたら、これから先は読んでもしようがない、大学での学習とは違うことをなさったほうが良いかもしれません。

でも、そんな方ばかりではないと思うので、続ければ、あらゆる細部を思い出すことはできないので、思い出は美化されるかどうかはともかく、ある種の抽象化がなされるわけで、つまり記憶と言うのが「パターン化」だとすると、そのパターンと、別の（場所、状況で）得られたパターンを比較対照することで、新たな知見、考えが生まれてくるはずなのだ。つまり、一定の記憶なしには、何らの思考もありはしない。記憶（データ）に裏打ちされていないアイデアは、単なる思い付きで、考えとは言わない。

というわけで、電子辞書は白紙の状態からの学習には不向きなことが、わかっていただけたかな？しかし、多くの方が、中学・高校6年間の蓄積があるA語やB語は、知っているはずなのに、思い出せない単語の検索や、翻訳などに、電子辞書はとても役に立つでしょう。また、普段は意識していない、J国語の使い方なども、大抵の電子辞書なら、なんらかの国語辞書が、最初から入っているので、知らないことばを、あやふやな漢字を、まめに調べることはできます。初修言語学習者には、紙の辞書！既習言語使用者には電子辞書！と言うのが、さしあたりの結論です。

（2013.03.01）

【第35回】世界は広いぞ！外国語教育研究会・上映会のオススメ

LL研究室室長・経済学部教授　　寺尾　　格（ドイツ語担当）

外国語のススメも35回目を数えます。これまでにご執筆頂いた諸先生方の記事を拝見すると、その多彩な内容に、あらためて外国語を学ぶ奥深さに思いいたった次第です。学習のための様々なヒントも数多いようですので、ぜひぜひLL研究室のHPから、過去の「外国語のススメ」の記事を覗いてみてください。絶対に損はしないでしょう！

第34回外国語教育研究会
『英語は声から～通じる英語のための発音とリズム～』

さて、今回はもうひとつ「外国語教育研究会」のオススメです。これまでの研究会では、コンピューター利用等々の外国語教育の方法などを中心に、様々な実践報告や議論などを行ってきましたが、一昨年から、外国語教育の具体的な技術を越えて、より広く、深く外国語教育を考えるために、新たな方向を模索しつつあります。外国語教員のみを対象とするのではなく、広く学生の皆さんや、あるいは一般の方々をも対象として、外国語の背景となる文化・社会・歴史等々への関心を呼び起こすような内容の講演、シンポジウムや映画上映などを開催しています。

例えば一昨年は、「外国人から見た東日本大震災」のテーマで、各国の報道の相違などについて、あるいは震災直後に報道活動にたずさわった外国人ジャーナリストの報告を交えたシンポジウムを二週連続で行いました。昨年はイギリスの俳優さんによる「英語は声から」という実践的な講演およびワークショップが大盛況でした。同じくイギリスの作家デイヴィッド・ピース氏の小説「東京三部作」をめぐり、「越境する言葉、幻の東京」と題して、作家本人による英語の朗読と、執筆や翻訳をめぐる質疑応答。また上映会としては、スペイン語と中南米の社会を扱った「忘却Oblivion」（3月）と、フランス語と植民地支配を扱った「アフリカ、お前をむしりとる」（12月）で、どちらも上映後、学生も参加した質疑応答の意見交換が盛り上がりました。このようなドキュメント映像は、評価が非常に高いにもかかわらず、娯楽中心の一般上映では見る機会が限られていますから、大学という社会的な教育機関ならではの企画だろう・・・と自負しています。

というわけで、今年も様々な興味深い企画が無料で（！）行われます。教員室や研究室受付の廊下にもポスターが貼られますから、チャレンジ精神の旺盛な学生の皆さんも、どうかお出で下さい。世界は広いぞ！

（2013.02.01）

【第34回】海外でカッコ悪い自分に出会おう！

文学部教授　　上村　妙子（英語担当）

モントリオールのセント・ローレンス川付近の夏の風景

私が英語の教師になってからの長い月日の中で、変わらないことと変わってきたことがあります。変わらないことは「すぐにペラペラに英語をカッコよく話せるようになる」と謳った英語学習本の多さと、変わったことは最近の若者の海外離れです。

昨年の夏カナダのモントリオールに２週間滞在しました。その時、大学院時代を過ごしたアメリカのペンシルバニア州にある町を訪ねお世話になった方々に再会しようと思い立ち、旅行の計画を練りました。いざ出発となった時がすべてのハプニングの始まりでした。

まず、北米の東海岸をハリケーンが襲い出発便がキャンセルとなり、電話をかけまくって予約を取り直すことになりました。やっと出発できピッツバーグ空港に着きホッとしていたところ今度は荷物が出てきません。仕方なく係員に一泊するホテルの住所を告げたところ翌朝届きました。ようやく目的地に着き、なつかしい方々と再会でき楽しい数日を過ごしました。モントリオールに帰るため、ピッツバーグ空港に行き中継地であるワシントンに到着し、後はワシントン空港から乗り継いでモントリオールに帰るだけです。モントリオール便の出発時間が近づきゲートに向かうと“delayed”の表示が出ています。

それならちょっとコーヒーを、と思い、ゲートに戻ってみるとゲートにいた乗客の姿はほとんどなく、何と表示は“cancelled”に変わっていました。急いでサービス・カウンターに行くとそこには乗客たちの長蛇の列ができていました。待つこと２時間、ようやく自分の番になると、何とモントリオール便は翌日にならないと飛ばないと告げられ、それからが40分近くに及ぶ交渉の始まりです。別便の手配を交渉すると、翌朝別の空港から出発すると告げられました。仕方がないので、今度は一泊するためのタクシー券とホテルの宿泊券を得るための交渉をしました。疲れた体を引きずってワシントンに一泊しモントリオールに帰りつきました。

アメリカのホストファミリーと

この間終始私は、「ぺらぺら」と「かっこよく」英語を話していたのではなく、自分の英語力を駆使して何とか目的を達成しようとするクタクタに疲れた「かっこ悪い」外国人旅行者でした。英語力は「かっこ悪い」失敗を繰り返しながら、時間をかけて磨いていくものです。海外であればなおさらです。若者の皆さん、海外に出て、「かっこ悪い」自分を見せながら、英語を少しずつ、でも着実に、身につけてみてみませんか。

All Photographs: Copyright(C) 2013 Taeko Kamimura

（2013.01.07）

【第33回】ドイツのクリスマス～～冬の旅のススメ

経営学部准教授　　西口　拓子（ドイツ語担当）

写真1. ドイツのクリスマスリースは、ドアに飾るのではなく、テーブルの上に置きます。（教会では吊るされていることもあります。）手作りをする人も多いので、リース部分や飾りも個別に販売されています。写真は12月25日のものなので、四本点灯しています。

すっかり日も短くなる11月末に、各地でクリスマスマーケットが始まります。街には電飾の、室内にはろうそくの光があふれ、外は寒くても気持ちが暖かになります。劇場では、フンパーディングの「ヘンゼルとグレーテル」やホフマンの「くるみ割り人形」が上演され、クリスマス気分が盛り上がります。 ドイツのクリスマス (アドヴェント＝待降節) は、イブから四週間前の日曜日に始まります。その日に、クリスマスリースの一本目のろうそくを点します。日曜毎に一本ずつ増やし、四本全てに点灯されるといよいよクリスマスも目前です。

写真2.種類も枚数もたくさん焼きます。部屋中に甘い香りが漂って、気分はすっかりクリスマス。

アドヴェントの期間に欠かせないのが、クッキー作りです。この頃、スーパーにはクッキーの材料が、本屋さんにはレシピ本が並びます。何人かで集まって作ることが多く、イマドキの学生たちと一緒に焼いた時は、ネット上にあるレシピをパソコンで見ながら作りました。一度にたくさんのクッキーを焼き、各自が持ち帰ったり、他の人にプレゼントしたりします。(写真2)

近年、日本でもドイツのクリスマスケーキ「シュトレン」Stollen を見かけるようになりました。特に有名なのはドレスデンのものです。(写真3) ただ、若い人たちは、シュトレンはあまり食べないようでした。

写真3.ドレスデンのマルクトのシュトレンの屋台。観光客向けに薄くスライスしたものも売られていました。ほとんどのドイツ人は１kgあるオリジナルサイズ (12ユーロ) を購入していました。

写真4.香辛料と蜂蜜がたっぷり入ったレープクーヘン。レープクーヘンで作られたお菓子の家 (「ヘンゼルとグレーテル」の魔女の家) もこの時期にショーウィンドーに並びます。

クリスマスマーケットは、マルクト広場等で期間中は毎日開催されます。ツリーのオーナメント、ろうそく、手工業品をはじめ、ソーセージ、釜焼きの黒パン、レープクーヘン(写真4)、ナッツのお菓子、チョコレートなどの屋台が並びます。そして、甘い香りが人々を誘惑するのです。(だからクリスマスが終わると、雑誌は一斉にダイエット特集を組むのです。)

名物は、香辛料と砂糖を入れて暖めたホットワイン (写真5) で、これを飲むと寒さも忘れることができます。ホットワインのカップは、デポジット制ですが、記念に持ち帰る人も多く、有名なマーケットでは、年号入りのものがあり、買い揃えたくなります。

写真5.ホットワインといえば「赤」ですが、最近はローテンブルク以外でも「白」が売られるようになりました。写真は私が一年間過ごした町 (ランダウ) のカップです。ここは、サンタのイラストで有名なトーマス・ナストの出身地で、クリスマスマーケットは小規模ながらもよく知られています。

写真6.ドレスデンのクリスマスマーケット

寒いけれど、光があふれて美しいクリスマスマーケットは、一見の価値があります。ドイツ旅行をするなら、ぜひこの時期に！

さて、家庭でのクリスマスの過ごし方ですが、今回は、二人の子どものいるドイツ人家庭での様子を紹介します。

24日の朝、お母さん (私の友人) は、注文しておいた七面鳥 (丸焼き用) を二羽、受け取りに行きました。その間、お父さん (友人の夫) は居間を片付け、ツリーを入れる準備をします。

クリスマスツリーは一般家庭でも本物のモミの木を使います。日本とは異なり、家庭内にツリーを飾るのは24日で、そのまま1月6日まで飾っておきます。

今回の木は少し背が高すぎて、先端を切らなくてはなりませんでした。木を居間に運び入れたり、切ったりするのはお父さんの仕事です。飾り付けは子どもも手伝って全員で行います。友人宅では、子どもがまだ幼いため、ガラスのオーナメントは使わず、フェルトや紙、チョコレートでできたものを使いました。 (写真7)

写真7.12月24日の居間

午後になると、お父さんは子ども向けのクリスマスミサへ子どもを連れて出かけていきました。お母さんは自宅に残り、晩餐の準備に大忙しです。

夜になって、双方の親や兄弟が徐々に集まり、持参したプレゼントをツリーの根元に置きます。大人同士も贈りあうため、大変な量です。包みには宛名が書いてあります。

食事の前にプレゼントが贈られる時間 Bescherung があります。みながプレゼントを開け始めます。私の住んでいた町は、ワインの有名な産地だったため、大人へのプレゼントには困らなかったのですが、子どもたちに何を贈るかには頭を悩ませました。結局、大手の本屋チェーンで絵本を購入しました。

写真8.12月25日のランチのテーブル。ナプキンと、鉤針編みの飾りによる手作りのサンタさん。この日のために、趣向を凝らして準備をします。

ドイツでは、既に持っているものやサイズが合わないものをもらった人は、直接お店に行き、他の商品と取り替えることができるのです。（大手チェーンならば他の町の店でもOKな場合が多い。）毎年、クリスマス直後のニュースでは、デパートに交換に押し寄せる人々の映像が流れます。

さて、今回の晩餐は、七面鳥の丸焼きをメインに、ラプンツェルのサラダ （グリム童話にも出てくるサラダ菜の「ラプンツェル」）と、キッシュでした。デザートは義理の妹の手作りの焼きりんごのバニラソース添えでした。(ドイツのパーティでは料理やデザートを持ち寄ることが多いのです。) 焼きりんごは、家庭での冬の定番デザートです。

25日の朝、皆がのんびり寝ている間に、敬虔なカトリック教徒であるお父さんは、ひとりで早起きをして、早朝ミサに出かけて行きました。

お昼は、お母さんの両親宅に、総勢40名ほどの親戚が集まりした。家にある椅子を全て集めて準備してありましたが、居間には全員分は入らないため、子どもたちはキッチンのテーブルで食事をします。メニューは、スープに始まり、じゃがいも、芽キャベツ、牛肉、パイ、そして焼きプリンのデザートまで付いた、凝ったものでした。お料理を堪能しながらおしゃべりを楽しみます。

その後、お父さん方のお祖母さんの家に移動し、コーヒータイムとなりました。(写真１と9) ここでも手作りのクッキーとケーキが待っていました。大人はスパークリングワインで乾杯します。その後、お父さんは疲れからソファーで高いびき……これは、日本とあまり変わらない光景でしょうか。

年に一度、こうして親戚が揃って楽しく語り合いながら、クリスマスの夜は更けていくのでした。

写真9.お祖母さん宅のツリー。ガラスのオーナメントをたくさん飾った美しいものでした。

伝統的なクリスマスについて知りたい方は、ぜひ『クリスマスの文化史』(若林ひとみ著) を読んでみてください。

All Photographs: Copyright(C) 2012 Hiroko Nishiguchi

（2012.12.01）

【第32回】言葉と意識

商学部准教授　鈴木　健郎（中国語担当）

　宗教学と中国宗教史の研究をしているので、ここ何年もの間、夏休みになると中国各地の道教系の山岳聖地を、研究仲間の先生方といっしょに登って調査しながら、具体的な自然環境（地形や景観や風や水や気の流れ）の中での身体と意識、感性と思想と言葉の問題を考えている。
調査は、北京や上海のような大都市に行くのとは違っていろいろ面倒やたいへんなこともあるけれど、汗だくで歩いた後に、山の清澄な空気や風を受け高く開けた空を眺めるとたいへん気持ちがよく、こういう場所を特に選んで修行していた人たちの気持ちや感覚が少しはわかってくる気がする。
こうしたことは、研究室で文献を読んでいるだけではなく、現地に行って実際に歩いてみなければわからない。しかし、記録や研究論文（中国語のほかに英語や日本語やフランス語などで書かれたものも多い）を調べずに単に行ってみるだけでは、自分がどういう歴史のある場所を歩いているのかわからないし、そもそもその場所に行ってみようとすら思わなかったに違いない。

　人間が具体的な環境の中で身体の使い方を練習し、自分や物の輪郭や区別を覚え、それを言葉で何と言うのかを覚えていくことは、世界を言語的に認識し、言語によって考える意識を発達させてゆくことである。
世界をどのようなものとして体験するかは、その人間の構築している言語的意識のありかた次第という面がある。宗教思想には、すべては意識が作り出しているものだと考える立場もあり、宇宙も世界も人間も人間が作ったわけではない共通の言語的な秩序によって作られていて、普段は隠れているその秩序に同化すること、あるいはその秩序が産出される超越的な次元に達することで、根源的な力と自由が得られると考える立場もある。
実践的には、言語的な意識を正しくコントロールする練習、イメージや象徴など特殊な言語的意識の使い方の練習、自然の中で山や雲や星と一体化するような意識と身体感覚の練習、日常的な言語意識の活動を鎮めてより深い領域を活性化させる瞑想的修行、武術的な修行などいろいろなことがおこなわれるが、言語や意識が身体や世界のあり方と深く関わっていることや、そうしたあり方は多層的で多様であることをいうことはおおむね共通している。
中国で深い山にこもって気功や瞑想の修行をしていた人たちもそういう人たちであったようである。

（2012.11.01）

【第31回】It asks the customer from whom it smokes?

文学部教授　　奥原　宇（英語担当）

　ご存知の方も多いかと思うがengrish.comという珍妙な誤用英語を集めたサイトがある。engrishという綴りを見ても分かる通りこれは日本人による英語の誤用を茶化した造語だが、現在では必ずしも侮蔑的な語彙とはされていないようだ。そのサイトには広告、掲示文、Tシャツの英文など、さまざまな珍妙な英語が写真付きでアップされている。本来はクスッと笑って楽しめばいいのだろうが、英語教師を生業にしているとついなぜそういう誤用が生まれるのだろうと考えてしまうところが悲しい。数年前そのサイトに、ある日本のホテルの掲示が掲載されており、目にとまった。

　そこには日本語とそれを翻訳したらしい英語の掲示が並べられている。「喫煙されるお客様へ、お願い」というタイトルのもと、「煙が外に出ないためにもエリア黒枠内で喫煙のご協力をよろしくお願いします」と日本語があり、その下に英語で、It asks the customer from whom it smokes./ So that smoke should not go outside/ It smokes in the obituary of the area./ Please continue your favors toward cooperation.　　とある。

上記の日本語掲示を英語に翻訳することを依頼された人間は多少なりとも英語の知識があるはずで、どう考えてもこのような英文が出てくるはずはない。そのとき私はこれは機械翻訳の仕業だとふと気づいた。そこで上記の日本語をネットの無料翻訳サイトで翻訳させてみたら案の定4つの翻訳サイトのうち、2つがここにあるものとほぼ同じ英文を出してきた。

　機械に翻訳させたものをそのまま公の目にさらすことを躊躇わないホテルの神経も相当なものだが、多少なりとも英語を学んだ者なら、この英文がどこかおかしいくらいのことは気づいてほしいものだ。機械に翻訳させるにしても、事前の準備と後の手入れが必要なのだ。上記の掲示の日本語そのものが舌足らずな感はいなめないが、それをさておいても、機械が理解しやすいように日本語を手直ししてフィードすればもう少しましな英文がでてくるはずである。

　試しに、日本語を「喫煙するお客様へのお願い。煙が外に出ないように、黒い枠で囲まれたエリアの内側で喫煙するように協力をお願いします」と書き換えてYahooが提供する無料翻訳ソフトに入れてみると、以下のような概ね掲示の意図が推測できる程度の英文が得られる。

The request to a smoking visitor. Please cooperate so that smoke does not go out to smoke in areas surrounded with the black frames.（yahoo翻訳）

同じ頃に出ていた傑作がもう１つ私のファイルに保存されている。どこかの町の選挙のポスターであろうか、「Sunny Town Erection Party 21　明るい町づくりの会21」というロゴに囲まれて候補者らしき人物の大きな笑顔の写真があり、「××で行こう！」（××にはその人物の名前らしきものが入る）とある。これが典型的なengrishなのか（election/erectionの誤り）、機械翻訳（町づくり→town erection）のなせるワザかは定かでないが、誤解を招きかねないポスターである。（今回、メモしておいたURLを検索したが、どうやらこのポスティングは削除されたようだ。）

スマホが普及した今日、このサイトや、英語のjokeを集めたサイトなど、ゲーム以外にも活用法はいろいろあるはずだ。

Photograph　:　Copyright(C) 1999-2011 Steven - Engrish.com / Webmaster

（2012.10.01）

【第30回】外国語のすすめ――英語プラス

文学部教授　　黒沢　眞理子（英語担当）

昨年、NYに長期滞在し、日本の寿司の普及ぶりに驚きました。パック入りの寿司がスーパーであたりまえに売られています。その普及ぶりたるや、健康的で、おしゃれなイメージが一人歩きをして、sushiという言葉が実体を超えて使われ始めたくらいです。例えば、就職活動のインターン先紹介サイトが「インターンsushi」だったり、NYで買った仏製のおしゃれなサンダルはなぜかsushiでした。言葉の使われ方は面白いですね。

日本のsushiがアメリカの地にすっかり根付く一方、NYの日本人勢力は確実に縮小しています。テレビから日本語の番組が消え、代わりに、中国語と韓国語が幅を利かせています。スペイン語のチャンネルなど英語より多いのではと思えるほどです。

客員研究員となったコロンビア大学も、キャンパスで多く見かけたのは東洋人で、ほとんどがかつて少数派だった中国人と韓国人でした。日本語はめったに聞こえてきません。大学の統計によると、その年の全入学者に占める留学生の割合は、大学史上最高の23%だったそうです。中国人がトップで３割近くを占め、次に韓国、インドと続きます。

15年以上も前に、大学運営に関する授業を聴講した折、今後拡大する中国、インド市場を見込んで、アメリカは語学教育を中国語とヒンディー語にシフトする戦略をとったということを学びました。まさにその時のアメリカの展望が、そのままキャンパスを歩いているように感じられました。彼らは授業でも活発に発言し、おしゃれですっかりニューヨーカーになっています。流暢な英語をしゃべり、西洋文化を学んだ中国人や韓国人がこれから増々大勢、国際社会で活躍をすることになるでしょう。皆さんは、これからグローバルなビジネス世界に入れば、そのような人たちとライバル、あるいはパートナーとして接することになるのです。

このような変貌ぶりに驚きながら、夏の英国調査で、ヒースロー航空に降り立ったとたん目に飛び込んで来たのは壁に書かれた次のようなメッセージでした。「英国人口の５倍の中国人が英語を勉強している」！英国に来てまでこれ？そして、続けて「アメリカでスペイン語の新聞を読む人は、ラテンアメリカでスペイン語の新聞を読む人よりも多い」！

英語、そして言語を取り巻く環境は確実に変化しています。そのようなエキサイティングな世界に住む皆さんにオススメしたいのは、英語プラス中国語や韓国語、スペイン語なども視野に入れた語学戦略です。NY滞在で実感したことは、英語の窓を通して見える世界が確実に変化しているということでした。

Photographs: Copyright Mariko Kurosawa 2012

（2012.09.13）

【第29回】若いうちに語学を学ぼう

経済学部教授　砂山　充子（スペイン語担当）

1. スペインバスク地方 サン・セバスティアンのコンチャ海岸

大学時代、ある友人がこう言いました。「大学のたった４年間で満足に学べるのは、正しい知識を得る方法と語学ぐらいだ」と。やけに説得力のある言葉でした。それは今でもそうだろうなと思っています。経済学、法学、文学、歴史学など皆さんが学ぼうとしている学問は奥深いものです。４年間の大学の課程で到達できるのは、それぞれの学問分野の入り口くらいまでしょう。ただ、語学は４年間頑張れば、それなりの力をつけることができます。語学に限って言えば、若くて頭が柔軟であればあるほど早く身に付きます。

2. ビルバオ グッゲンハイム美術館

英語を中学高校と６年間もやってきたのに使い物にならない、と言う人は多いでしょう。でも待ってください。コツコツと勉強してきてそれでも出来ないのでしょうか？きっとそうではないはずです。最近、「勉強しないで聞き流すだけでよいのです」と銘打ち宣伝をしている語学教材がありますが、私はきちんとした語学力はやはり勉強しないと身に付かないと考えます。確かに外国語をたくさん聞いて耳を慣らしていくことや、表現を暗記して繰り返すことは語学力向上に効果があります。私も中学高校時代、英語のテキストや詩を繰り返し音読し暗誦するしたものです。ただ、自分で表現したいことは、暗記だけでは表現できません。外国語として学ぶ以上、その構造や最低限の約束事（つまり文法）をわかっていないと、いつまでもきちんとした言葉を使えるようにはなりません。

3. バレンシア火祭り 「メルケルとサルコジ」

大学では毎日スペイン語の授業がありました。今のように週休二日制があまり普及していなかった時代に、私が通っていた中学高校はミッション系だったため土日が休みでした。それが大学に進学した途端、月曜から土曜日まで毎日学校に通うことになりました。しかも土曜日は1限がスペイン語、２限は体育実技という時間割でした。大学は共学でしたが、体育の授業だけは男女別でした。担当の先生が「テニスやバレーボールなどはこの先いくらでもやる機会があるだろうから、ラグビーをやろう」とおっしゃり、ラグビーをやることになりました。今のように女子サッカーやラグビーがあまり普通ではなかった時代です。しかも、グラウンドは土手からも地下鉄丸の内線のホームからも丸見えという場所です。女子学生がスクラムまで組んでラグビーの真似事をやっているというので、見物人も随分いました。話はそれましたが、そんな土曜日にも耐えて毎日大学に通って勉強した結果、何とかスペイン語が使えるようになったというわけです。

4. バスク地方のピンチョス

スペイン語をはじめとする外国語を学ぶ環境は随分と変化しました。私が大学に入学した当時、まともに使えるスペイン語の辞書は１種類しかありませんでした。クラス全員が同じ辞書を持ち、まだ完璧ではなかった辞書の何カ所かを先生の指摘で修正したのをいまでもよく覚えています。当時は電子辞書はなく、紙の辞書だけがたよりでした。ある先生はよくこんなことをおっしゃっていました。辞書を引き慣れれば、手が覚えて調べたい単語のページがすぐに開けるようになる、と。私はとてもそこまでにはたどり着けませんでしたが、どれくらい辞書と向き合うかが、語学力向上のバロメーターになるかもしれません。その先生から言われたもう一つのことで記憶に残っているのは、語学能力は母語以上には伸びないということです。例えば、現在の日本語（または母語）のレベルを100とすると、外国語運用能力はどんなに頑張ってもそれ以上にはなりえない、せいぜいが70～80%だということです。まわり道のようですが、外国語能力を高めるには、同時に母語の能力も高めていかなければならないということです。

5. セルバンテス文化センター

ここから先はスペイン語を学んでいる皆さんへの情報です。私がスペイン語を勉強し始めた頃に比べれば、今の皆さんはとても恵まれた状況にあります。インターネットを開けば、すぐにスペイン語の新聞（スペインの左派PSOE系新聞のEl País やサッカー専門紙Marca）を読んだり、あたかもスペインにいるかのようにスペインのテレビやラジオ番組を視聴することが出来ます。皆さんに是非、足を運んでもらいたいのが、東京にあるスペインとも言えるセルバンテス文化センター（Instituto Cervantes）です。セルバンテス文化センターでは、スペイン語の授業だけでなく、講演会や展覧会、映画会、コンサートなどスペイン語圏に関する様々な催しが頻繁に行われています。図書館ではスペイン語の書籍やDVDが手軽に楽しめます。スペインのワインやタパスが楽しめるメソン・セルバンテスというレストランも入っています。こうした恵まれた環境を十分に活用して、是非、若いうちに語学を身につけてください。そうすれば、それは必ず皆さんの一生を通じての宝となるはずです。

Photographs 1-4: Copyright Mitsuko Sunayama 2012
Photograph 5: Copyright セルバンテス文化センター東京 1991-2012

（2012.08.01）

【第28回】「声を出す」ために

LL研究室長・経済学部教授　寺尾　格（ドイツ語担当）

初夏の日差しが、少しずつ真夏に向けた準備をしている。一日一日のわずかな変化にはなかなか気づきにくいのだが、季節は確実に移っている。同じ季節は再びめぐり来るだろうけれども、同じ時間は二度と戻ってこない。ドブに捨てるような時間の使い方はモッタイナイのではないだろうか。

大学での勉強は、これからの人生と社会活動のための知的な基礎作りだろう。専門知識やガッツが必要なのは言うまでもないのだが、知的活動を支えるのが、いわゆるコミュニケーション能力である。そう言うと、すぐにテクニカルな面ばかりを思い描きがちなのだが、目先の技術ばかりを工夫しても、そんなものはすぐに役立たなくなる。むしろ相撲で「三年稽古」と言うような、じっくりと時間をかけた「足腰の強化」という土台を構築しておくかどうかが、その後の人生を支える最も重要な課題である。

「三年稽古」の具体策については、それぞれの科目の先生にお任せするとして、外国語の基礎の基礎となる注意を一言。そもそも「言葉」とは、単なる「知識」では終わらず、それをどのように「運用」するのかが不可欠である。つまり「言葉を発する」とは、具体的な「相手」に向けて、自らの心と身体の全てをフルに活用した「呼びかけ」のパフォーマンスであり、それこそが「コミュニケーション」の核である。単なる知識ではない。その際、俗に言う「心ここにあらず」では「言葉」は「言葉」の用をなさない。

コミュニケイトとは単なる知識の機械的な「伝達」ではなくて、相手と「つながる」ことで作り上げる「コミュニティ」形成という人間的な意志表明の相互作用である。「お友達になりたい！」と思って「心を開く」という意味での心理的な「胸を開く」意識は、同時に身体的に「胸を開く」ことにもつながるので、「声を出す」ための身体的な「構え」を用意することになる。要するに外国語を学ぶとは、単なる知識の獲得を越えて、言葉と文化・社会との、そして身体と精神との相互作用に気づくことであり、「他者」とのコミュニケーションによって作られる社会活動の土台となる行為なのである。
補足として、ドイツ語の授業でいつも学生諸君に繰り返し述べている、発声の前提となる身体の構え方の基本のキを以下に挙げる。

1. 身体の中心軸を意識して、正しく立つこと。
2. アゴを軽く引き、頭を上へと引っ張るようにして、胸を開くこと。
3. 丹田への重心の位置を意識すること。
4. 横隔膜での支えにより呼吸をコントロールすること。

上記の身体的な「構え」が身についてから具体的な発声に入る。つまり声の響かせ方のコントロール、調音、そして滑舌の練習へと移るのだが、長くなるので、また別の機会に。

（2012.07.02）

【第27回】 海外へ出よう！～留学のススメ～

商学部教授　岡田　もえ子　（英語担当）

ノッティンガム大学

私は今までに、短期ではSan Diego, Newcastle-upon-Tyne, 長期ではNottingham, Lancaster, Londonに滞在したことがある。アメリカ西海岸のサンディエゴを除いて、他は全てイギリスである。短期の2つは大学時代の夏期語学研修、長期のうち2つは大学院修士及び博士課程、残りの1つは専修大学在外研究員制度で滞在した。合計すると8年近い。

ランカスター大学

長期滞在して特に愛着を覚えている3都市をそれぞれ一言で表すならば、ノッティンガムは「森」、ランカスターは「湖」、ロンドンは「文学」である。ノッティンガムにはシャーウッドの森があり、そこにはロビンフッドが住んでいたと言われる樫の木や、DHロレンスの小説に出てくる美しい情景が広がる。ランカスターは湖水地方の入口に程近く、ピーターラビットが駆け回っていたベアトリクス・ポターの家や、自然を詠んだロマン派の詩人ワーズワースの家など、湖畔の穏やかで素朴な景色が素晴らしい。

ロンドンは首都であるので何でも揃っている。東京に比べると非常に小さく、何処へ行くにも30分とかからない。その狭い中に、劇場、美術館・博物館、図書館、公園、カフェなどがひしめきあっている。運転をしない私には大いに都合が良い。大英博物館やロンドン大学があるブルームズベリー(Bloomsbury)と呼ばれる地区には、ジョージア朝の街並みがそのまま残されている場所がある。歴史地区に指定され、勝手に建物の外観（窓など）を変えることは許されない。

このエリアは、かつてチャールズ・ディケンズ、ヴァージニア・ウルフ、TSエリオット、オスカー・ワイルドなど文豪達が集った地で、私の憧れの場所である。日本人では夏目漱石も滞在している。まさに文学を肌で感じられる地域だ。

ジョージア朝の建物が並ぶブルームズベリー地区

小説家ディケンズ

詩人TSエリオット

なぜわざわざ外国に行くの？もちろん第一の理由は英語習得の為や学問・研究目的であるけれど、その他にも沢山学ぶことがあるから、私は海外へ行くのだ。日本で座学も良いけれど、その場所に行って直接「体感」することによって初めて理解できることも多い。例えば、北部（ランカスター）の暗くて長い長い冬を経験したからこそ、春の訪れを告げる真黄色のラッパ水仙の有難さが身にしみる。20歳の頃、ワーズワースの「水仙」を読んでもピンと来なかった。今なら、その詩の言葉の奥にある真の意味が理解でき、共感できる。

イギリス人が愛するラッパ水仙

また、外国人のクラスメイトと議論することによって、世界にはいろいろな考え方があることが分かる。日本人なら恐らくA+B＝Cと導き出すであろう論理展開でも、外国人の答えはA+B=D、E、F…と無数に出てくる可能性がある。行動パターンも同様である。様々な国籍や背景の人が集まって形成されている英国や米国では、「沈黙は金」ではない。「以心伝心」もない。自発的に伝えようとしなければ、伝わらない。待っていては、何も起こらない。引っ込み思案の大人しい私が、留学によって変わった。

中高生時代、英語が大好きだった私。「もっと知りたい」「もっと学びたい」「私の英語はネイティブに通じるの？」そんな想いから大学1年の夏休みにサンディエゴへ。思えばそこが私の留学の原点。今でもなるべく海外の学会へ発表しに赴くことにしている。外国の研究者と交わり、その国の風を肌で感じ、体感を通して新しい発見をする為に。

若者よ、海外へ出よう！

All the photographs: Copyright Moeko Okada 2011-2012

（2012.06.04）

【第26回】「そと」の事情と「そと」への志向

法学部教授　佐藤 恭三　（英語担当）

初めての在外体験が今から40年前の1972年9月、カナダ・オンタリオ州のマックマスター大学でした。政治学専攻修士課程の学生として、授業料免除の他に、リサーチ・アシスタントとしての報酬が週55カナダ・ドル――1米ドル360円の固定相場から308円の変動相場への移行期でしたが、これで毎月の下宿代や食費（1日2食主義にやむなく転向）を含む生活費が辛うじて賄えました――という「恩典」に浴しました。

この恩典は往時の日本の経済状況と無縁ではありません。日本は未だ「豊かな国」ではありませんでした。1961年発足の池田内閣の「所得倍増計画」の掛け声にも拘らず、1964年の東京オリンピック開催にも拘らず、1960年代後半からのベトナム戦争の泥沼化、従って、アメリカ軍物資の大量の日本への投下にも拘らず、日本は未だ「先進国」とは見做されていなかったのです。これが僕に幸いしました。

戦後まもなくすると、先陣を切ったアメリカに遅れまいとヨーロッパの先進諸国も、相対的に貧しい諸国からの有為の若者に高等教育の機会を与えるという博愛主義的政策を、植民地主義や帝国主義への贖罪意識もあってか、積極的に推進しました。北米大陸では、専攻分野のGRE（Graduate Record Examination、現行方式とは異なる）とTOEFLで優秀な成績を収めれば、授業料の減免措置は普通でしたし、学部時代の成績や推薦状、受け入れ大学の教員スタッフの研究上の必要度に応じて、ティーチング・アシスタントやリサーチ・アシスタントの道も開かれていました。事実、修士課程在籍者11人のうち、僕以外のアジア地域出身のキム君（韓国）もウィリー君（マレーシア）も、授業料は免除されていました。

今や日本のGDPは世界第3位、紛れもなく「豊かな先進国」の仲間入りを果たしました。そして、言うまでもなく、かつて僕が享受した恩典はとっくの昔になくなりました。逆に、本国人よりも高い授業料を払うのが当たり前ですし、ましてや、奨学金を得るのは至難の業です。隔世の感があります。それに、今時の若者は「そと」に出たがらないそうです。内向きになっているのですね。憧憬の対象では最早ない欧米に、どうして苦労までして行く必要があるのかということなのでしょう。その上、情報化時代を迎えて、その気になれば凡そあらゆることがネット上で検索できますから。

それでも、敢えて一言。欧米に限りませんが、「そと」に行って生身の自分の五感を駆使して得られるものは、一生ものの貴重な体験なのですが……、残念です。

（2012.05.01）

【第25回】 マイ・バーバラ！

経営学部教授　成田　雅彦　（英語担当）

先日、昔の本を読もうと思って手に取ったら、中から薄い金属製のしおりが出てきた。枯葉の形のしおりである。何年そこに挟まれていたことか。周りのページは変色して茶色いしみがついていた。これは、大学生の時、バーバラという英会話学校の先生からもらったものだ。最後の授業の時、バーバラはみんなに小さなプレゼントをくれた。僕には、このしおり。「自然はアメリカ文学でとても重要なものです。この葉はそのシンボル。」そう言って、大学院に進んでアメリカ文学をやりたいと言っていた僕に選んでくれたのだ。

三十年以上も前、まことにしがない大学生であった。授業には興味なく、ほぼサボっていた。遊び歩いていたわけではない。まったく孤独であった。大塚の古い四畳半のアパートに暮らし、夜中に本を読み、日中は寝ているという生活を送っていた。授業に行けるわけがない。自分みたいな何の価値もないのが生きてていいんだろうか、などと思うこともあった。そうした生活に風穴をあけたいと思ったのであろう。バイトで稼いだなけなしの貯金をはたいて英会話学校に行くことにした。自分としては、かなり思い切った決断であった。渋谷の宮益坂の小さな英語学校で、夏季集中コースというのに出た。

そこにいたのが、バーバラだったのである。「アイム・バーバラ。ノット、バラバラ。」とその背の極めて高い、不思議な風貌のアメリカ人は言った。先生という感じがまるでしなかった。ただ、深い目の奥のまぎれもない知性と、あふれ出る自由が、この人を操り人形のように動かしていた。僕は一遍でこの人が好きになった。予想は的中した。最初こそ殊勝にも英会話の授業めいたことをやっていたが、やがて秋になると僕とお茶大のちづるさんという学生を相手に、バーバラはアップダイクの短編や小説、エッセイ、映画などを素材に、驚くべき世界のことを語り始めた。衝撃であった。授業の後も、三人でビッグ・マックを買って代々木公園に向かい、必ず立ち入り禁止の植え込みをくぐって空き地に行って話を続けた。バーバラは、裸足で鼻歌を歌いながら仕切り石の上をバランスを取って歩いたりもした。小春日和だった。自由な人だなと思った。とてもカッコよかった。そうか、こんなふうに生きたいように生きればいいのか、と僕は嬉しくなった。

僕は英語を猛然と勉強しはじめた。バーバラの自由を獲得する。それが、僕の英語学習の目標であった。バーバラには３年教えてもらった。アメリカに行って勉強しなさい、と別れ際に言われた。どうしているだろう。そう思ってネットで調べてみたら、今は詩を書きながら大学で教えているという。大学の自己紹介のところに趣味と称して、キャベツ畑に寝転んで星を見ること、とあった。マイ・バーバラ！

Photograph: Copyright(C) Masahiko Narita 2012

（2012.04.02）

Copyright(C) 2000-2014 Senshu University All Rights Reserved.